ゆるい哲学　（短編脚本）

作　鈴木　宏志

約一時間

一稿（二〇一四年十月四日～二十三日）

キャスト　四人（男3、女1）

沢渡　淳平
石橋　孝雄
沢渡　輝子
沢渡　勇気

●一場　春

沢渡淳平は頭を抱えてソファに蹲っている。ときおり思い出したように髪を掻きむしる。
そこへ、石橋がふらりやって来る。あいにくそこには自販機がない。
淳平は立ち上がるものの、行き場所を見つけることができずに戻る。淳平は石橋が気になるが、できることなら無視したい。しかし、顔を背けることができない。

沢渡「なんてことをするんですか。タカさん」
石橋「ああ？　なんてことって、ほどのもんじゃない。ピンさんにもらったポリポリポッキー食ってるだけだ」
沢渡「なんてことをするんですか。タカさん、タカさん、タカさん」
石橋「おう、おう、おう。お、そうか。せこい奴だなお前。ほら、特別にポリポリポッキー恵んでやる」
沢渡「要らないって言ってるんだ、そんなもの」
石橋「荒れてますね」
沢渡「荒れてますよ、そりゃ。花も嵐も一緒に来てますから」
石橋「それを言うなら、盆と正月が一緒に来たようだ、だろうが。日本語は正しく使え」
沢渡「ハロウィンとクリスマスイブが一緒じゃ駄目ですか」
石橋「あ、それ、ピンさんの影響大だな」
沢渡「ピンさん？　関係ないです。それに、ピンさんにはこないだ勝ちました」
石橋「お、あれを勝ちきったのか？　ギリギリだったのに、偉い奴だなお前も。よしよし、今度俺にポリポリポッキーをおごれ。そしたらきっと、次もいいことある。うん、間違いない」
沢渡「タカさん」
石橋「なんだよ」
沢渡「見てないんですか、結果。日付変わる時刻までかかったから、さっさと帰るのはいいとして。普通記憶しておくもんでしょう。棋譜のコピーだって簡単に手に入るんだし。若手のだって勉強になるんだし」
石橋「見てねえよ、若手の棋譜なんて。んなもの見てねえよ」
沢渡「おかしいな。こないだ、若手ナンバーワン長島ちゃんのこと、先生、先生ってえらく持ち上げてました」
石橋「しらねえよ、そんなもの。俺は若手集めて勉強会だ、何が悪い？　スターは常に若くてピチピチした血を吸って生き延びるんだ。サワタリ、お前は混ぜてやらないぞ」
沢渡「是非混ぜてください。誰々ですか、研究会のメンバーは。若くて新鮮な血を分けてください」
石橋「いや、力の差がある者はちょっとご遠慮願いたい。（偽の電話）なに？　ああそうか。男は既に定員オーバー。女性に限る、あいわかった、ピチピチしたところ探すから。ヨロピク。お後がよろしいようで」
沢渡「ああ、結構、もう結構。これ以上僕に話しかけないでください」

石橋「おい」
沢渡「……」
石橋「おいってば」
沢渡「なんなんですか。馴れ馴れしい」
石橋「荒れてますね」
沢渡「荒れてますよ、そりゃ。花も嵐も一緒に来てますから」
石橋「いいか、サワタリ。溜めておくってのはだ、男の身体に毒ってもんだ。だからな」
沢渡「さっさと感想戦をおっぱじめよう、ですか」
石橋「記者だって俺たちの言葉が二言三言ないと書けないんだ。奴らは二言三言あれば充分満足する。明らかに寝不足だ。早く仕事から解放してやろうって気は起きないのか。お前には優しさってもんがないのか。人としての優しさってものが」
沢渡「ああ、タカさんの顔を見てると、はらわたが煮えくり返ってどうしようもない」
石橋「荒れてますね、頭抱えて」
沢渡「荒れてますよ、そりゃ。花も嵐も一緒に来てますから」
石橋「さっき聞いた。サワタリ、お前のそのおかしな日本語どうにかしろ。そうでなきゃ、みっともねえから頭に工事現場用のヘルメットでも被ってろ」
沢渡「え？　さっき、優しさがどうこうって言いませんでしたか、タカさん」
石橋「言ったなあ。お前には相手に対する気遣いがないのかって」
沢渡「タカさん！　あなたにそんなことを言う権利はこれぽっちもないんだ、ないんだ、ないんだ」
石橋「荒れてますね、声を荒げて」
沢渡「荒れてますよ、そりゃ。花も嵐も一緒に来てますから」

ふすまの向こうでそっとこっちを窺う記録係君に、まだだ、もうちょっと待てと合図を送る石橋。

沢渡「タカさん。タカさーん」
石橋「お、おう（慌てて振り返る）」
沢渡「何で僕をいじめるんですか。ああー、ちくしょう。何で僕をいじめるんですか」

ポッキーを大事そうに食う石橋。

石橋「荒れてますね。泣いちゃって」

ソファから勢いよく立ち上がる沢渡。すたすた歩いていき、目元を擦る。顔も擦る。頭も擦る。背中にタオルを回し乾布マッサージまでする。

沢渡「タカさんが泣かすんだ」
石橋「勝負の世界に涙はつきものだ。いや、まったく厳しい現実だ。こんなに甘くはない。ポッキーのほうが甘い」

沢渡「上り調子の僕を、なんで止めるんですか」
石橋「あ、捕まえた！　なーんてな」

大判のハンカチでサワタリの両腕を縛る。

沢渡「放せー。コラ、放せ、解け」
石橋「サワタリ、お前が上り調子なのはわかってた。そしてこの俺は、連敗のどん底だ。若くてピチピチしたところを吸っても、さっぱり勝てない。連敗トンネルなんか、さっさとぬけたいんだよ、俺だって新幹線走らせたいんだよ」
沢渡「放せー。コラ、放せ、これを解け」

石橋は縛ったハンカチを解いてやる。

石橋「わかったわかった。そのかわり殴りかかるな。その足を下ろせ。今度は足も縛るぞ」

高く蹴り上げていた足を下ろす沢渡。

沢渡「僕が今日勝てばプレーオフ進出なのわかってたんだろ」
石橋「わかってたよ、そりゃあ。サワタリが俺に勝てば、挑戦権巡ってプレーオフ決定。サワタリが俺に負ければ、長島ちゃんがめでたく挑戦権獲得。まあ、お前にとっちゃあ大きな大きな一戦だったわけだ」
沢渡「そういった大事な一戦で、いつもタカさんは僕を叩くんだ。なぜなんですか、一体僕の何が気にくわないんですか」
石橋「はあ？」
沢渡「なぜ、僕をそんなに叩くんですかって聞いてるんですよ。耳が遠くなったか、このジジイ」
石橋「はあ？」

石橋は惚けた振りして扇子で木彫りの狸か何かの頭をぴしゃりと打つ。
頭を覆い身構えた沢渡の脇の下、横腹を扇子でくすぐる。

沢渡「あひょ、あひょ、あひょ（逃げ回る）」
石橋「はあ？」
沢渡「あひょ、あひょ、あひょ」
石橋「きみ、踊りがうまいね」

踊り、やがて崩れる沢渡。

沢渡「今晩だけじゃない、三ヶ月前も、一年半前もそうだ」
石橋「三回連続逆転負けじゃ、厭になっちゃうよなあ。それともあれか、俺がよっぽどお

前と相性がいいのか。こんな風によ」

くすぐられ踊る沢渡。

石橋「きみ、踊りがうまいね」
沢渡「あひょ、あひょ、あひょ。なんでそんなに……、あひょ、あひょ、僕ばっかりいじめるんですか」
石橋「哲学なんだな、これが」
沢渡「何なんですか、そんな哲学どこにあるっていうんですか」
石橋「忘れたのか、サワタリ。米長哲学を。自分にとって大した勝負でなくても、相手にとって重要な意味がある場合は全力を尽くして事に当たる。けして、消化試合にはしなーい」
沢渡「知ってますよそれくらい、大先輩の教えだ。だけどタカさん、皆に対してその哲学通してますか？　僕だけにやってるんじゃないでしょうね、まさか」
石橋「お前にだけなんて、そんなせこいことやらねえよ俺は」

またもやくすぐられ踊る沢渡。

沢渡「あひょ、あひょ、あひょ。はあ、はあ、はあ。それをやられるくらいだったら、手を縛られていた方がまだマシだ。早く縛ってください」

すぐさま縛る石橋。

石橋「これで、よしっと。温和しく感想戦に入る気になったか」
沢渡「哲学はどこへ行ったんですか」
石橋「ひとまず、ここ（胸）に仕舞った。哲学なんてものはな、そう易々とひけらかすもんじゃない。埃を被ってしまう」
沢渡「それって、僕らの誇りである大先輩の借り物じゃないですか」
石橋「伝統といえ、伝統と」
沢渡「ああ、弁当食べたい。二人分食ってやる」
石橋「伝統だっちゅうに」

沢渡は自ら部屋に戻っていく。
その直後に別の若い悲鳴。駆け出す石橋だけに照明。
走った先で、沢渡が窓を開け、ダイブしようとしている。

沢渡「うわあああああ」
石橋「ここは五階だぞ、こらあ。（振り向き）何震えてるんだ、お前も掴め、こらあ。記録係、早くこいつの身体にしがみつけ。いい加減にボールペンを放せ。しがみつけ」
沢渡「放せ、タカさん。お前がこの手を放せー。僕はお前が嫌いだー」

石橋「わかったわかった。（記録係へ）わかった、お前の足が前に進まないのなら、誰か呼んでこい。内線でもいい、こっちに人を回せ。大勢人を回せっていってるのが聞こえないのか。沢渡は狂言なんかじゃないんだ。もたもたするな、馬面。早く行け！馬なら尻を叩かれんでも走らんか」

もつれ合いながら、暗転。
車のヘッドライトが差し込む。
泥酔状態であるく沢渡と石橋。黄色いヘルメットを抱く沢渡。

石橋「ほら、しっかりしろ」
沢渡「クリンチしてるんじゃねえ。タカさんがしたいのはリンチだ」
石橋「タクシーを拾うぞ。サワタリ、お前少し下がれ」
沢渡「下がれ、だと。タカさんも同じ位置まで下がれ。一列に並べ。前へ倣え、ピッピッピー。ピッピッピー」
石橋「わかったわかった。ほら、危ない。轢かれるぞ」

控え目なクラクションが鳴り響く。

沢渡「轢けるもんなら轢いてみろ。轢き殺してみろ。だけど、ぺしゃんこの蛙じゃないぞ。黄色いアヒルを抱いて、僕らは生きて家に帰るんだ、ねえ、タカさん。タカさん、タカさーん」

道路に飛び出た沢渡に大きなクラクションが鳴り響き、無数のライトが入り混じる。

石橋「サワタリー！」

暗転
輝子と勇気のいるリビングに照明。

輝子「サワタリ君、今晩二回死にそうになったんだって」
勇気「え、またか？　今度は親父、何やらかしたんだ」
輝子「五階の対局室からダイビングしようとしたのを上からキャッチされて」
勇気「下でキャッチしたら恐いだろ」
輝子「勇気、ちょっとやってみようか」

二人で天井を見上げて、両手を挙げフラフラする。

勇気「この姿勢で落下物をキャッチするんだ」
輝子「目がくらんで、もう何も見えない。足元フラフラー、フラフラー」
勇気「ってか、お袋、目瞑ってどうするんだよ。上から落ち来る人、ますます恐いだろ。

命預けてるんだから」
輝子「だって、人ってこんな大きいんでしょ。手のひらでうまくキャッチできるかな」
勇気「手に余る。目に余る」
輝子「ああ、とても無理。目開けていられない。偶然に任せるわ、偶然手の中には収まるのに任せるわ」
勇気「頼むから怖いことといわないでくれ」
輝子「やっぱりキャッチするなら上からだ、タカさんは間違ってない。サワタリ君、次は流れてる車の中に飛び込んだところで、タックルされたんだって」

舞台下手で転がっている沢渡と石橋に照明。やがて立ち上がる。

沢渡「タクシー逃げちゃいました、タカさん」
石橋「あったり前だ。誰がお前みたいな危険な客を乗せるかよ。俺だってお断りだ。お前を乗せてくれるタクシーはもうない、あれが最後だ。歩いて帰るぞ、こっから」
沢渡「そんな手、ありですか。寄せ方間違ったんでしょう。王様を追うから逃げられるんだ。包み込むように寄せるんですよ。下手だなあ、タカさん」
石橋「抱きつくな、コラ。クリンチするんじゃねえ。俺はノーマルだ」
沢渡「僕だって正真正銘ノーマルです。そっちこそリンチするんじゃねえ」
石橋「角交換型四間飛車とかよく指してるだろ、このところずっと採用してるだろ。あれのどこがノーマルなんだ。ゴキゲン中飛車だって、昔の常識から考えたらノーマルなんかじゃない。立派なアブノーマルだ」
沢渡「タカさんの得意としてる一手損角替わりはどうなんだ。通常の角替わりに比べたら、そっちこそアブノーマルだ。ざまあ見ろ」
石橋「文句垂れてないで、しっかり仕事やれ、お仕事を」
沢渡「やってるじゃないですか、お仕事を。せっせと振り飛車。宣誓、サワタリ淳平は、一生涯、振り飛車党を宣言します」
石橋「サワタリのは飛車を振ってるんじゃねえ。尻を振ってるんだ。尻を振ればなよなよしやがる。股間を振れば攻撃的になる」
沢渡「捌き、といって欲しいですね、捌きと。とろとろ逃げ回ってるよりまだマシです」
石橋「こっちは掴まらないようにするのが仕事なんだ。お前みたいにタクシー逃すようなヘボはしねえ。俺が負けたら、股間じゃなくて、沽券にかかわる」
沢渡「タカさん、僕がタクシー捌いちゃったことを怒ってるんですか。きれいに捌くのがお仕事なんです。そらみろ、お仕事ちゃんとやってるんだ」

勇気「がっちりクリンチしてます」
輝子「タカさんのリンチに負けてません」
勇気「荒れてますね、親父」
輝子「荒れてますよ、サワタリ君」
勇気「そりゃあ、花も嵐も一緒に来てますから」
輝子「そりゃあ、花も嵐も一緒に来てますから」

勇気「何か日本語おかしくないか？」
輝子「サワタリ君、立派な学問の道に進んでないから」
勇気「どのみち、もう帰ってくるんだろ」
輝子「サワタリ君、終わった後の感想戦が長いから、どうだろう」
勇気「負けた方が勝った方を圧倒するくらいしゃべれる場って、他にないんだろう？」

沢渡「タカさん、やっぱりこれ変です。どうみても変です」
石橋「どうした、サワタリ。早く指せ」
沢渡「何で僕たち、電柱の下でボードゲームやってるんですか。しかも、ポケットタイプのこんなちっちゃなボードで」
石橋「サワタリが、あの局面でどうしても納得できないって言うからだ。いわば、お付き合い。指さなかったら秒読みするぞ、十秒、……二十秒……」
沢渡「タクシーの中だったらまだしも、こんな電柱の下で。蛾だって、羽音立てて無数に飛び交ってるじゃないですか」
石橋「青色 LED には、蛾が近寄りにくい。青信号には、車が突っ込んでくる。常識だ。それにな、俺は無性に電柱の下で勉強したくなるんだ。貧乏世代だから、蛍の光が恋しくてしょうがねえ」
沢渡「タカさん、その指太すぎて、ボードのちっちゃな盤面メチャクチャです。もっと丁寧に、指突っ込んでください。いちいち直すの大変なんです。ああ、そんなぐりぐり突っ込んだら嫌われます。そこはとってもデリケートな部分なんですから」
石橋「ごちゃごちゃ、うるさい男だ。負けた方は感想戦で仇をとりやがる」
沢渡「伝統ですから」
石橋「伝統より、俺は腹が減って、お前んちの弁当を食いてえんだ。それもこうやって集中してると気が紛れるもんだな。そのうち、家に着くだろ」
沢渡「着きませんよ、タカさん。僕たち、さっきからずっと電柱の下に立ちっぱなしじゃないですか」
石橋「なに？　いいから、前に進め。ほら、進め進め、前進だ」

輝子「サワタリ君のお弁当、できた」
勇気「ねえ、お袋。お袋は何で親父のこと、サワタリ君って呼ぶんだろ。俺、前々から不思議だったんだ。丁度いいや、今夜はそこんとこトコトン追求させてもらおうか」
輝子「サワタリ君はサワタリ君だよ」
勇気「それって、大学んときの呼び名じゃないの？」
輝子「ちがうよ。ねえ、勇気。サワタリ君のお弁当、これで足りるかな。終わってからの感想戦が長いのよ、サワタリ君たち。喋ると滅法お腹空くんだから」
勇気「荒れてますから」
輝子「荒れてますから。サワタリ君、うまくタクシー拾えたかな」
勇気「大人なんだから、タクシーくらい拾えるだろ」
輝子「サワタリ君、騒ぎ起こすじゃない。いきなり走ってる車の列に飛び込んだり。体当たりしてもタクシー拾えないんだから」

勇気「そりゃあ、まあ、人間が体当たりしてきたら、タクシーの運ちゃんも逃げるわな」
輝子「勇気ったら、サワタリ君を当たり屋みたいに言わないで」
勇気「お袋がさっき、騒ぎ起こすって言ったんだろ」
輝子「荒れたら、花も嵐も一緒に来ますから」
勇気「それですべて片付いちゃうんだよな、うちは。よくそれで、トップでいられるもんだと訝りたくなるよ。だいたい、親父ったら一番上のクラスなんだろ」
輝子「トップにいるからこそ、おかしなことしなきゃって張り切るんだ。跳んだり跳ねたり、鉄棒ないところで逆上がりやったり、畳で泳いだり、ときにはタクシーに体当たりしたり」

必死の形相で逆上がりしたり、苦しい息で床を泳いだりする輝子。
しばらく眺めた後、その脇で勇気も泳いでみる。メチャクチャ泳いでみる。

勇気「こんなことで人気が出ちゃうのか。そんなの俺だってできる。人前では恥ずかしくてできやしないけど」
輝子「わかっていても普通の人はやらないでしょ、人前で。人目を気にして、ああ、誰か見てる、ああ、誰かが何か言ってる、指さされてる。こんな姿隠さなきゃって。世間体をコンマゼロ秒単位で気にしてる」
勇気「それが人間だ。恥ずかしい人間の姿だ、悔しいけど」
輝子「当たり前のことやってちゃ、花も嵐も一緒に来ない」

間　実験するように手脚を動かす。

勇気「何で親父のこと、サワタリ君って呼ぶんだっけ」
輝子「あたしがちょっとだけ間抜けに見えるように。あたしがちょっとだけお馬鹿さんに映るように、サワタリ君が考えたんだよ。あたしが浮いてみえるように」
勇気「わかんねえな。親父が何考えてるか、ちっともわかんねえ」
輝子「何でわかんないのよ、サワタリ君の息子のくせに」
勇気「そんなこと言ったってさ。当たり前のことやってくれないからな、親父」

頭を悩ませ、ふたたび床で泳ぐ勇気。その力のなさに発破をかける輝子。

輝子「頭のいい女と喋るのは面白い。知識の泉に真っ逆さまに飛び込むようで面白い。二度と起き上がれない快楽に溺れるのと同じだ。世の中にごまんと女はいるけど、面白い女は限られてる。それは本当に頭のいい女だ。だけど、僕と一緒に住むなら、ちょっとだけ間抜けのほうがいい。輝子が間抜けだと僕も格好がつく」
勇気「なんだよ、それ」
輝子「サワタリ君が言ったの。ああ、これが迷わない条件だなってわかったの」
勇気「迷わない条件？」
輝子「ああ、この人にこれがあったら。ああ、この人がこんなことをやってたら。ああ、

この人がこんなものを持ってたら。人間って、おい、どこ見てんだよ、ってところばっかり目がいってるの。その人そのものより、その人の付属品が欲しいの」
勇気「なんでもかんでも、できすぎちゃいけないってことか？　容姿端麗とすべてのカードが揃ってちゃいけないってことなのか？」
輝子「友達や仲間にお披露目するなら自慢できるかもしれない。だけど肝心要の僕が楽しめないんじゃ、がっかりだ」
勇気「それでお袋は、少し間抜けな女になったってわけか」
輝子「でも、勇気に間抜けって言われるとかなり腹が立つ。いい？　女が威張ってる家は、どっかトゲトゲしいの。忙しくしてる人間は嘘に走る。何でもイエスイエスイエスは頭が悪い証拠。女は間抜けになるほど、やりくりが上手になるの。ああ、それから。勇気が生まれたときも大騒ぎだった」
勇気「荒れたんだろ。花も嵐も一緒に来たみたいに」

花がちらちら舞い始める。
勇気はテーブル脇にどけてある沢渡の布製の盤と駒を弄る。

輝子「これで僕はまたひとつ、人並みでこの上ない幸せを手に入れてしまった」
勇気「なんて大袈裟、リアクション王子さま」

相手の差し手に驚愕して固まった表情をつくる勇気。

輝子「だけど、両方同時に手に入れることはできない」
勇気「両取り逃げるべからずの格言通り、相手が放置したからと、じゃあ有り難く両方いただきます、では反則か」
輝子「そうだ、僕は引退すればいい。結婚、赤ん坊、とふたつも人並みの幸せを手にできたんだから。そうだ、もうそれしかない」
勇気「ちょっと待った。親父が出産するわけじゃないんだぜ。女が出産、子育てで仕事やいままで頑張ってきたことを諦めるってのいうのはよくあるけど、親父は男だ」
輝子「どっちでもおんなじことなのよ。サワタリ君の場合、物事の釣り合いが問題なんだから。何かを手に入れれば、そのかわりに何かを失う。見せびらかす必要もないのに、どうしてそんな当たり前のことにみんな不平不満を洩らすんだろう」
勇気「欲張りなんだ。誰だってすべてが手に入るなら、すべてをほしいと思うじゃないか。俺も、親父やお袋と違って欲張りなんだ。仕事と愛が混ざってきてる。だけど何で、仕事と愛を一緒に考えて選ぶと、ザワザワした不快な気持ちになるんだろう」
輝子「キラキラした、手垢でたっぷり汚れたものが、もれなく一緒についてくるから」

輝子も相手になり、勇気と盤に向かう。が、あっさり優劣が鮮明になる。

輝子「（一礼）ゆるい手でしたね、とサワタリ君が勝った相手に声をかけました」
勇気「（一礼）そうですね、と話を合わせて感想戦がはじまりました」

輝子「息子が僕と同じ道を行くなんて、これっぽっちも思ってない。サワタリ君は仲間にいつもそう言い触らしてる」
勇気「サワタリ君はなんて物分かりのいい親なんだ、と息子の俺が言ってみる」
輝子「親子でおんなじ道に進んで、子どもの方が親より偉くなったなんて話、聞いた例しがない。親の背中が大きすぎると子どもが苦しいんだ」
勇気「親の期待と言わないところが、うちらしい。だけど、やっぱり俺は欲張りなんだ」

花吹雪が激しく舞い降りる。それを手に取り、空へ舞い上げ、雪のように遊ぶ勇気と輝子。（花吹雪は片付けないで、二場で雪として活用）

輝子「今夜も荒れてますね」
勇気「今夜も荒れてますよ。花も嵐も一緒に来てますから」
輝子「花も嵐も一緒に来てますから」

暗転

●二場　冬

忙しなくポッキーを食ってる石橋。向こうからやって来る沢渡にふっかける。

石橋「何てことするんだよ」
沢渡「ぼくが何かしましたか？」
石橋「馬鹿、ポッキー折れちゃったじゃないかああ。おれのポリポリポッキーが折れちゃった」
沢渡「折れたのが歯ではなく、ポッキーで良かった。ぼく、新しいの買ってきます」
石橋「ポリポリだぞ、間違えるなよ」
沢渡「サクサクも美味しいんです」
石橋「やけにすました顔してるじゃないか。それがお前の哲学って奴か？　サワタリ」
沢渡「ああ。今日はタカさんにとってリーグ降格するかどうかの瀬戸際、大事な勝負の日でしたね。すっかり忘れてました」
石橋「忘れてただと？　こいつー、目障りだ。ところでサワタリ、お前の夕食は何だ？　まさかポッキーじゃねえだろ」
沢渡「……」
石橋「なんだよ、言えよ、ほらポリポリ言えよ。まあ、言わなくたって塾生に聞けばわかることだがな」
沢渡「残念ですが、夕食は頼んでません」
石橋「なんだよ。お前の夕食が届いたらコショーぶっかけてやろうと思ったのに、気が抜けちまったぜ」
沢渡「ずいぶんとゆるい哲学ですね。鼻水垂れてきました」
石橋「俺はこっちが本業なんだ、ゆるい奴が」

沢渡「ふうふう。千日手指し直しですから、感想戦はなしでお願いします、タカさん。ふうふう」
石橋「なんだよ。ふうふう言って。体力ねえのはこっちだっていうのに。ふうふう言いてえのはこっちだっていうのに」
沢渡「ふうふう。鼻水垂れると鼻呼吸できなくなるんです。ふうふう。言葉に敏感な体質なんです」
石橋「それは条件反射って奴だ。コショーって言葉だけで反応する、なんて便利な体質なんだ。コショー、コショー。コショー、コショー。おい、条件反射って怖いぞ。段々不安になってくるな、俺の車が故障したみたいで」
沢渡「どっちにせよ、同じ指し直しなら千日手でよかったじゃないですか。まだ夕飯前だ」
石橋「持将棋で２００手も３００手も指した後、もう一回やったら確実にぶっ倒れる」
沢渡「引き分けで終わらないんですから。明日の朝まで掛かろうが、昼まで掛かろうが結局勝負が決するまでやるんですから。真夏に二回連続持将棋出たの覚えてますか？」
石橋「中川だろ？　相手誰だっけ。わすれた、まあいいや。一晩中指して、朝になったら中川の奴、ワイシャツ脱いで、肩からタオル背負って正座していやがった」

自らワイシャツを脱いで上半身を晒す石橋。

石橋「上半身裸で指しちゃイカンって取り決めでもあったのか」
沢渡「自制したんです」
石橋「自制したあ？　なんでそんなつまんねえことするんだ。横やり入ったのか、お偉い方の。おおー、寒くなってきた。何で俺がこんなくそ寒い季節に脱ぐんだよ。おい、寒いって言ってんだよ、扇いだって、俺はちっとも尊くならんぞ。俺はお前の師匠じゃねえんだぞ」

扇子で風を送る沢渡。ワイシャツを着る石橋。

石橋「来い、お前も付き合え」
沢渡「どこへ行くんですか。後二十分ほどですぐに指し直し局がはじまるんです」
石橋「うるせーな。身体が冷えちまったから頭も冷やさねえとバランスが悪いんだ。あ、サワタリ、ついでに俺のコートもとってこい」
沢渡「外ですか。雪ですよ今晩の東京は」

部屋の中に入り、押し入れから二着のコートを取り出し石橋の後を追う沢渡。
歩きながらコートを着込む。
花吹雪（雪）が降った場所で。

石橋「感想戦だ」
沢渡「次の指し直しまで時間がないっていったでしょう」
石橋「俺はやりたいんだよ。いいか、サワタリ。人間、何か感じていながら何も言わない

のは卑怯なことだぞ。感じたことを言葉にしろ。親兄弟で隠し事をするんじゃねえ。
これは正真正銘、俺の哲学だ」
沢渡「わかりました、わかりました。負けた方が感想戦でペラペラ喋りまくって勝った気分を味わうのは良しとしましょう」
石橋「いささか語弊があるが。いや確実に悪意を感じる。さっきのは千日手だったはずだ」
沢渡「だけど、打開できなかった。打開する権利はそっちにあったはずです」
石橋「わかった、わかった。とにかく俺にも言わせろ。俺は言いたくてしょうがない」

肩をすくめて、どうぞと身振りで示す沢渡。
道行く女を眺め。

石橋「どっちだ？　左だな」
沢渡「同感です」
石橋「だいたい、あの足にホットパンツは許せない。猫も杓子も流行追ってどうするんだ。
じゃあ次、俺は右端」
沢渡「ひと目、同感」
石橋「ひどい縦縞だ。あれじゃまるでサッカーの審判ユニフォームだろ。前に躍り出てみたいな。首からホイッスル提げてるぞ、きっと。よし、次、斜のラインだ。俺は左サイド」
沢渡「同じラインで行きたいです」
石橋「横に広く、肩幅のある子に限って、何でボーダー柄着るんだろうな。益々横に広がるのがわかんねえのか、ねえちゃん。じゃあ次、お前の真後ろ。俺は右だ」
沢渡「妥協点で同感」
石橋「あの太腿もお尻もスキニージーンズじゃ隠せないってのがわからんのかねえ。色使いも悪いし、まるでセンスがないんだよ」
沢渡「まったく以て同感です。その扇子は僕の扇子ですが」
石橋「ボロボロだな、俺だってセンスはあるって言うのに」
沢渡「そっちの扇子です」
石橋「！　返すよ、ほら。返せばいいんだろ。おい、サワタリ。全部の読み筋、俺に言い当てられて向かっ腹が立ってるんだろ」

暗転。
深夜に近い時間帯。雪の舞い落ちた場で。

石橋「またもや千日手か。俺はほとほと疲れたぜ。おい、どうしたんだよ。青い顔して」

携帯を握りしめたまま、悄然とした沢渡が近づいてくる。
背後で巨大な刃物が振り下ろされる影。

石橋「どうしたってんだよ、おい」

沢渡「……息子が、勇気が、」
石橋「おい、後ろ。危ない、逃げるんだ。聞こえないのか、うわっ（伏せる）」
背後で巨大な刃物が何度か振り下ろされる影。
地面の雪と沢渡に赤い照明。血染めの雪のように。
沢渡「息子が、殺されたんです」
石橋「なんだと？」
沢渡「帰らせてくれ。今すぐ帰らせてくれ。息子が殺されたんだ」

リビングで茫然とする輝子。
沢渡の魂だけが家に帰り着く。身体は未だ帰れず。

輝子「サワタリ君。なるべく早く帰ってきてちょうだい。お願い、サワタリ君」
沢渡「ごめん、また千日手になったんだ」
輝子「千日手って、千日かかっても勝負がつかないことだっけ？」
沢渡「ああ」
輝子「同じ局面が四回連続で出現したときだった。同じ手順が四回繰り返される。どこまでいっても平行線。千日掛かっても勝負が決しない。だから、先手後手を入れ替えて指し直し。持ち時間は消費した分だけ引かれる。これで合ってる？」
沢渡「ああ」
輝子「どうして？　どっちか手を変えればいいじゃない」
沢渡「不利になることをしたくないんだ」
輝子「どうしてなの？　こんなときに限って、どうして同じ手順を四回も繰り返すのよ！」
沢渡「輝子……」
輝子「なんで三回で止めておかなかったの！　寸止めすれば、勇気は……。寸止めしてくれれば。あの子がナイフの刃先を勇気の胸元で寸止めしてくれれば良かったのに」
沢渡「勇気は……。僕たちの息子、勇気はナイフで刺されたのか？　何でまた、ナイフなんかで刺されなきゃいけないんだ。わからないことだらけだ。勇気は一体誰に刺されたんだ」
輝子「刺したのは、大学三年生の女の子。場所はその子の部屋」
沢渡「勇気は、その女性のところへ自分で行ったのか」
輝子「勇気の家庭教師だったの」
沢渡「勇気は家庭教師を頼んでいたのか。その大学生の女性に」
輝子「ええ、そう、そうなのよ。俺は欲張りだから、将来の選択肢を増やしておくんだって。覚えてるでしょ、サワタリ君」
沢渡「……確かに、そう言ってた、あいつはそう言ってた」
輝子「あたしや、サワタリ君と違って欲張りなんだって、自分のことをよくそう言ってた」
沢渡「刺した女性の名前はなんていうんだ」
輝子「名前は聞いてないわ。聞いたかもしれないけど、いまは思い出せないの。苗字はど

こにでもいる、佐藤。ありふれた苗字」
沢渡「大学生って言ったな」
輝子「大学三年生」
沢渡「アルバイトで家庭教師をやってるのか」
輝子「勇気はそう言ってた。近くでいい家庭教師が見つかったって。電車賃が浮くから助かるって、機嫌良く笑ってた」
沢渡「近くなのか、家の近くなのか」
輝子「電車じゃなくてもいける距離。歩いてなのか、自転車でなのかわからないけど」
沢渡「同じ町内かもしれない。あるいは隣の町内かもしれない。とにかく、それほど遠くないってことだ。もしかしたら、通勤や、彼女は通学だ、散歩で互いに会ってるかもしれない。いや、それどころか短い挨拶を交わしてるかもしれない」
輝子「電話帳で佐藤さんを探して、片っ端からかければわかるんじゃない？」
沢渡「電話口の相手に、なんて聞くんだ」
輝子「大学生の娘さんは居りますか」
沢渡「それから？」
輝子「娘さんはご自宅に生徒を呼んで家庭教師をしてますか」
沢渡「それから？」
輝子「家庭教師をしていたら」
沢渡「家庭教師をしていたら？」
輝子「その教え子は、高校生の男の子ですか」
沢渡「そこまで、ビンゴだったら」
輝子「最後に名前を確認しなきゃならないわ」
沢渡「教え子の名前を」
輝子「その教え子の名前は、沢渡勇気ですか」

衝撃音、赤い照明がくるくる回る中、崩れ落ちる輝子。

石橋「ゆるい手だった」
沢渡「タカさん」
石橋「さっきの千日手だ」
沢渡「タカさん、僕は」
石橋「まだ帰れねえぞ。これからだ。負けたくないんだろ」
沢渡「夜中の二時をまわってます。（記録係へ）君も少し休め。もう真夜中だ、誰も見ちゃいない。いくらだらしない格好をしたって構いやしないんだ」
石橋「おう、寝ろ寝ろ。布団がねえから、かわりに座布団でも被って寝ろ」
沢渡「タカさん」
石橋「なんだ、サワタリ」
沢渡「僕は息子が殺された理由よりも先に、殺した子が誰なのか訊いてました」
石橋「知る順序が反対だったら、穏やかな気持ちでいられるのか」
沢渡「本当にもう、帰りたいんです。本当はもう、眠いんです」

石橋「寝るわけにはいかねえんだ、親がくたばるわけにはいかねんだ」
沢渡「もう眠いんです」

石橋と沢渡も大の字になって倒れる。
沢渡の意識が飛んでいく。

輝子「いい加減帰ってきてちょうだい、サワタリ君」
沢渡「三度目の千日手が成立したばかりで、ひどく眠いんだ」
輝子「待ってるの。勇気が頭上から降ってくるのを下で受け止めようとさっきからずっと待ってるの。でも恐くて目を瞑ってしまう。するともう、足元がフラフラで立っているのがやっとの状態。それでも顔を上向けて、真っ直ぐに両手を伸ばしてる。そのかわり足が迷ってるのね」
沢渡「考えてるんだ。身体は疲れてくたくたなのに、頭はしっかり考えてるんだ」
輝子「考えてる？　何を考えてるの。私は勇気のことを考えてるの。こんな風にものすごくサワタリ君の帰りが遅かった春の夜。私はサワタリ君のお弁当をつくって。勇気は、サワタリ君の真似をして、跳んだり跳ねたり、鉄棒ないところで逆上がりやったり、畳で泳いだり、ときにはタクシーに体当たりしたり」
沢渡「そうか、勇気も畳で泳いだか。あいつは平泳ぎか、それともクロールか」
輝子「私が平泳ぎで、勇気はクロール。勇気の腕、すごく長いんだから。サワタリ君と同じくらい長いんだから」

沢渡と輝子は腹這いになって泳ぐ。しかしいくら泳げども、互いのところへたどり着けない。

輝子「何でこんなゆるいことやっていられるの、あたしたち」
沢渡「哲学に付き合ってるんだ、相手の哲学に」
輝子「哲学って、そんなゆるいもんでいいの？　勇気を殺した女性の家がわかったの。近所の人が教えてくれたの。やっぱりそんなに遠くなかった。歩いて五分しか離れていない、サワタリ君も知ってる家（うち）。お父さんが東京都庁のかなり上の方。あの家の娘さんだったのよ、勇気を刺し殺したのは」
沢渡「何でその子は勇気を選んだんだろう」
輝子「ようやくそこへ辿り着いた」
沢渡「輝子は、怒鳴りたいのをよく我慢してくれた」
輝子「ようやくそこへ辿り着いた」
沢渡「輝子は、苦しくて頭がどうにかなってしまいそうなのをよくこらえてくれた」
輝子「ようやくそこへ辿り着いた」

赤い刃が光り、暗転。

沢渡「ひどい手を指しました」

石橋「負けたくないんだろ。集中力が途切れたか」
沢渡「まだ途切れてません。途切れたのは息子の、勇気の命です。僕は帰ってもいいでしょうか。刺し殺された息子が待ってるんです」
石橋「お前の哲学は死んではいない。俺に、ありったけの力を出させたんだ」
沢渡「もう行かせてください、タカさん。もう随分と長いこと待たせてあるんです。もう行かせてください」
石橋「お前まだ走れねえよ、サワタリ。痺れが残ってるんだろ」
沢渡「足が縺れても、転んでも走るんです」
石橋「俺も連れてけ」
沢渡「タカさん、痺れた足で走れるんですか」
石橋「覚悟はできてるのか、サワタリ」
沢渡「覚悟って、何の覚悟ですか」
石橋「覚悟がまだできてないんだったら、感想戦もやっていけ。いいか、用意はできたか」
沢渡「何言ってるんですか、この非常時に」
石橋「やっていけよ、花も嵐も一緒なんだろ」
沢渡「何やってるんですか、僕たちは。途切れることなく何やってるんですか」

出ていこうとする沢渡。
いきなり反対側、窓に飛びつく石橋。飛び降りる不安定な姿勢。

石橋「うおおおおお！」
沢渡「何やってるんですか、タカさん。ここは五階ですよ！」
石橋「放せ、この野郎。危ねえのは承知の上で、お前の真似やってるんだ」
沢渡「冗談はやめてください、タカさん」
石橋「うるせい。お前は狂言じゃなかったはずだ」
沢渡「誰か！　誰か人を呼んでくれ。人を呼んでくれー」
石橋「俺だってやるんだ」

居合わせた男女の職員が駆けつける。（輝子と勇気役が役を変えて）

男「何かあったんですか？　あ、あ、あ、（一旦引っ込む）ちょっと来て。何やってんだ、イヤホン取れ、耳、耳、みみー。焼き芋なんか美味そうに食ってる場合か。来いよ、早く。お前、早く来い」
女「何かあったんですかー」
男「いいから、こっちこっち」
女「何なんですかー」
男「いいか、大きな声を上げるんじゃないぞ」
女「きゃあああ！」
男「声だすなって言っただろ。早く引き上げるんだ。一気にしがみつけ」
女「落ちる落ちる落ちるー（突進）」

男「何やってるんだ。押してどうするんだ。落っこちるだろう。引き上げるんだ。押したら駄目だ、こっちに引き上げるんだ」
女「それより、下に人を置いた方がよくないですか」
男「恐いことというな。手に余るだろ」
女「下で手を広げてキャッチするんです」
男「恐いことというな。手に余るだろ。頼むから、怖いこと言わないでくれ」
石橋「おい、放せ。漏れそうなんだよ、ほんとに漏れそうなんだよ」
男「そんなこと言ったって騙されません。台の上から下りるまで絶対放しません」
石橋「お前たちが三人がかりで押さえ込んでたら身動きができねえんだ。ああ、もういい。間に合わないんだったら、この窓から放出してやる。こっからばらまいてやる」
男「え？　マジですか。でもうっかり落ちると危険ですから、意地でも放しません」
石橋「ちょっとでいいから緩めろ。片手だけでも放しやがれ」
男「これで、ジッパー下ろせます？」
沢渡「もういいから、君たち、ここはもういいから、下に行って被害が出てないか確認してくれ」
男「は、はい、至急。おい、いくぞ。おい、どこ見てるの。人の恥ずかしいとこジロジロ見ないで。おい、どこ見てるの、こら」

女を引っ張って男が去る。抱きついたままの沢渡。

石橋「おい、サワタリ。俺はあのお姉ちゃんにこれ以上誤解されたくないんだ」
沢渡「！」

その場でジッパーをあげているところへ、男女の職員が戻る。

女「この建物の下だけ、狭くピンポイントで雨が降ってると口開けてました」
男「この季節にしては不思議に温めの雨だと騒いでます。若い奴らが両手を振ってキャッチしたようです。ただ、黄色い物には気付いてないようで、とても本当のことを教えられませんでした」
女「成分はあれですよね？」
男「黄色い絵の具だ」
女「外から帰ったら、うがいして手を洗えば大丈夫ですか」
男「うるさい、黙ってろ」
石橋「なんだ、こんな夜中にまだ通行人がいるのか。後数時間もしないうちに、新聞配達の自転車の音が響くっていうのに。水滴も凍るとバナナの皮に匹敵するぞ。滑って転ぶといけない。君たちは、バナナの皮が落ちてたら拾いましょうと呼びかければ良かったんだ」
女「バナナの皮って何ですか。ねえ、バナナの皮って」
男「うるさい、黙ってろ」
石橋「すみません。バナナの皮は俺が拾っておきます。この通り、すみませんでした」

女「やだ、訴えられちゃう。あたし、土下座強要してませんから」
男「うるさい、黙ってろ。この人、土下座するんだから、よっぽどの事情なんだ。お前になんかわかってたまるか」
沢渡「もう、君たちは下がってくれ。ここはもう大丈夫だから。急に呼び出してすまなかったね。もう下がってくれ」
男「は、はい、至急。おい、いくぞ。おい、どこ見てるの。人の恥ずかしいとこジロジロ見ないで。おい、どこ見てるの、こら」

女を引っ張って男が去る。

石橋「どれ、俺たちも帰るかサワタリ。タクシーもちらほら動き出してるだろうが、こないだみたいに歩いて帰るぞ。タクシーなんかで乗り付けたら目立ってしょうがねえ」
沢渡「体当たりしてでも、掴まえるつもりでいたんです」
石橋「そんなことしたら、こんな時間帯に帰る意味がない」
沢渡「え？　タカさん……それって」
石橋「なんだよ」
沢渡「わざとこんな時間帯まで、人目を避けて」
石橋「そんなわけねえだろ。どうして。お前を引っ張る理由がどこにあるんだよ。いいか、俺は今日、どうしても勝たなきゃならなかった。リーグ降格の崖っぷちだ、自力で勝つしか望みがない。それだけだ。屁はこいても、もう余裕こける身体じゃねえ。なんだよ、これ。また持ってきたのか？」
沢渡「感想戦でやり込めなきゃ気が済みません。威張りたいんです。やり込めたいんです」
石橋「おう、威張れ威張れ。負けた方の特権だ」

電柱の下、ポケットボード上で窮屈そうに指を動かす。

石橋「こう来る、こう来る。こう来るか。うんうん。おい、俺のごっつい指じゃ、楽しめないんじゃなかったのか。立ち止まって、いつまで経っても家に辿り着かないんじゃなかったのか」
沢渡「タカさん。息子の勇気が殺されたんです。勉強を教えてもらってた大学生の女性の家で刺し殺されるという、ひどい死に方で」
石橋「人から愛されるってのは残酷だ」
沢渡「残酷なのは殺すことです」
石橋「殺すほどの愛だってある。迷わない愛だってある。だけど、不純物の混ざった愛はいつだって欲張りなんだ。他人（ひと）に自慢するための愛に変わっちまう。欲しいものは山ほどある」
沢渡「欲張り、ですか。勇気もよく好んで使ってました。自分は欲張りなんだと」
石橋「自分のために愛したのか、他人（ひと）のために愛したのか」
沢渡「欲しいんです。他人が持ってるものほど欲しいんです」
石橋「人間はそれを我慢するんだ」

沢渡「マグネット式はいいですね、別れ話が少なくて」
石橋「その心は、迷わない永久磁石か」
沢渡「なぜ勇気を刺し殺したのか、てんでわからないんです。タカさん、何で自分の持ち駒隠すんですか、それって狡いです」
石橋「こうすると見えないだろ」
沢渡「ほんとだ、見えないですね」
石橋「相手の持ち駒が見えないと作戦も立てにくい」
沢渡「つまり、勇気と大学生の女の子はそういう状態にあったと」
石橋「しらねえよ。だけど手の内見せ合わない方が新たな発見も多い。逆に全部見えちまったら、さっさと席を隣に移ってしまいたくなることもある。それが人間ってもんじゃねえか」
沢渡「なぜあの子が勇気を刺し殺したのか、てんでわからないんです」
石橋「わからなかったら感想戦が長引くな」
沢渡「感想戦が長引くんですか」
石橋「誰だって負けたくないって、もがく。間違いなく長引く。だけどお前らは勝った側だ、耳を傾けてやれるよな、サワタリ」
沢渡「殺された方が勝った側なんですか、おかしくないですか」
石橋「殺した方は何も言えねえ。何も言えねえのは負けた方と相場が決まってる。そうなるから、感想戦では負けた方に存分に喋ってもらうよう工面するんだ」
沢渡「近所の家なんです。父親が東京都庁のかなり上の方です」
石橋「仕事と愛をミックスするな。仕事と愛でミックスケーキを焼いたら中まで真っ黒焦げになる。怯んだ手を指すな」
沢渡「え？」
石橋「サワタリ、お前と同じ父親の立場に何の違いがある？　対等だろうが」
沢渡「対等、ですか？」
石橋「職業に、仕事に立派もクソもあるか。立派かクソか区別するとしたら、自分のために仕事をやってる奴はクソだ。他人のために仕事をやってる奴が立派じゃない、まともなだけだ。こっち側もあっち側も関係ねえ」

沢渡側と、自分の側を交互に回って示す石橋。

石橋「お前ら、その家を離れないんだろ。そっちの家も離れねえかもな。殺した、殺された、許してくれ、絶対に許さない。殺した、殺された、許してくれ、絶対に許さない。四手一組の同じ局面が四回だけじゃすまされない。千日手どころの騒ぎじゃない。万日かかっても、百万日かかっても勝負が決することはない。生涯納得することはない」
沢渡「殺した、殺された、許してくれ、絶対に許さない。これを百万回。これを百万回」
石橋「どうだサワタリ、キリがないだろ？　手を変えた方が負けになる、負けたような気分になっちまう。面倒だな」
沢渡「手を変えた方が負けたような気分になっちまうんですか」

石橋「面倒だろ？」
沢渡「タカさん」
石橋「なんだよ」
沢渡「タカさん」
石橋「なんだよ、俺に甘えるな」
沢渡「人間は、相手を許せるんですね」
石橋「今気づいたように言うな」
沢渡「人間って、いきなりとんでもない戦いの渦に巻き込まれるもんですね」
石橋「しらねえよ」
沢渡「タカさん、タカさん」
石橋「俺は助けてやんねーぞ」
沢渡「今日、三回も千日手をやったせいか、打開してみたくなるかもしれません」
石橋「打開して不利になるかもしれねえんだぞ」
沢渡「体勢を立て直すのがたのしみです」
石橋「ふん。荒れてますね」
沢渡「荒れてますよ、そりゃあ。花も嵐も一緒に来てますから」

雪が舞い落ちる。
その先に無数のライトが待ち構えている。（報道やら警察やら）

石橋「あいつら、路面にバナナの皮を仕掛けてるな、確実に。わかるか、お前を捕まえるためだ」
沢渡「え？　バナナの皮？　タカさん、先に行って拾ってくれませんか。転びたくないんです」
石橋「俺は転んでもいいって言うのか」
沢渡「タカさんは捕まらないんでしょう？」
石橋「お前は何も悪いことしてねえんだろ」
沢渡「だけど捕まるんですか」
石橋「自分のことしか考えてないからな、あいつら」
沢渡「そういう輩とは一緒に仕事をやりたくないんです」
石橋「明かりがでかくなってきたぞ、サワタリ。お前の家の前だ。異様なライトがお待ちかねだ。いいか、捕まるな。一気に駆け抜けるんだ。仕掛けられたバナナの皮で滑るな。玄関口で鮮やかなでんぐり返りを決めろ」
沢渡「荒れてますね」
石橋「荒れてますよ、そりゃあ。生きてりゃ、花も嵐も一緒に来ますから」
沢渡「花も嵐も一緒に来ますから」
石橋「レディー」
沢渡「ゴー！」

光に向かって、気合いとはちぐはぐな調子でチンタラチンタラ走る沢渡と石橋。

光のなかに、妻と息子が立っている。
走り抜けた先で光が小さくなり消えゆく。
幕